

終刊にあたりて

昭和の聖業漸くその緒を見たが、世は尙蕩々として物質文明を謳歌し、利己主義・個人主義をのみ云々し、二千有六百年の皇道も失はれたかに見え、眼を東亞の天地に注ぐ者としては曉天の星の慨あつた昭和六年、駒澤の地に遊び、同じく東洋學の流を汲みし先進は、早くも時勢を豫見し江湖に「東洋學研究」一篇を問ふたのであつた。爾來星移る十載、時に隆替なきを得なかつたにしても、今年茲に第十號發刊の運びに到つたのであつた。來し方往く末を思ふ時、吾人は唯先達の達觀に三嘆すると共に、この永い年月の間、陰に陽にその發展を祈念下された顧問、先輩の各位、特に本誌をして學界に權威あらしめんと、御研鑽の果實を御寄稿下された師の君を始め先輩諸彦、又會員たる學友諸兄には盡きぬ感謝で一杯である。

しかし外、太平洋に波騒ぎ、百萬の王師、中華と稱へしその國に駒を進め、内、新體制を完成し、御聖業を翼賛し奉らねばならぬ秋、國家の至上命法に遵ひ、この輝かしき歴史に一應の終止符を打つべく餘儀なくされた。抑、吾等は會務遂行の頭初に當つて、廢刊か、將、繼續かの竿頭に立つた。それは主に財政上にその理由を有したのであつたが、吾等は全力を盡して前代より後代への楔華とならうとした——必ずや後進の士がこの微意を汲んでくれるであらう事を期待しつつ。しかもこの痴人の夢を繋ぐべく世の情勢は餘りにも急變した。遂に思想取締上の根據と重要資源確保の立場と、更に全學一体となりて、國家目的に添はねばならぬといふ精神的基調の下に、本誌に終刊號の名を附する事となつたのである。

今や學園に暗雲晴れ、學友會は報國團に發展的解消をなし、東洋學會も東洋學研究部としてその行學本部に統合せら

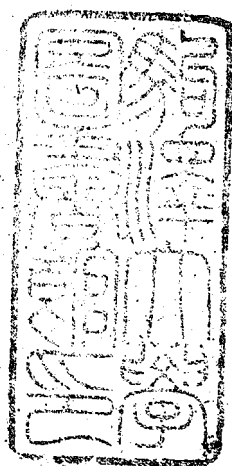
れ、輝かしき新發足を期してゐるのである。本紙は既に廢刊せんとしつつある。然しながら「科學する心」は精神科學の上にも叫ばれねばならぬ。我等の研鑽は、正に東亞の盟主日本の進路に指針を與ふるものである。それは日本のより偉大なそしてより良き發展への一礎石として重大意義を持つてゐるのである。我等の活動は決して終つたのではない。我等は雄々しく前進し続けるのである。

陽氣既に兆す窓邊にペンを握つて、拙文を物しようとすれば轉々感慨無量である。かつて筆者に、この世を早くはかなんだ兒なればこそ餘計可愛いのです、としみじみ漏した一母性があつた。十年の星霜は決して長いとは言へないかもしれない。寧ろ若々しい青年の活動を將に始めようとしてゐるのだと言ふべきであらう。その意味でこの母の述懐は又自分の心胸でもある。しかし國家目的達成の爲とならば喜んで終刊としよう。既に學びの業を卒へた多くの兄達は大陸の荒野に轉戦してゐるではないか。更に成長した逞しい壯者となつた姿を腫に画きつつ、笑つてこの子を御國に捧げやう。ペンを擱くに當り、重ねて在來の御寄稿各位に深謝し、今後益々御教導下さらん事を御願し會員諸兄の深き考究に期待し、併せて諸彦の御自愛を祈つて止みません。

誰が口吟むのであらうか。螢の光のメロデーが細く長く黄昏の空を振はしてゐる。

皇紀二千六百一年紀元の佳節に

つきせぬ思出を籠めて



幹事 渡部坦道 誌す